ISSN 2435-4279

紀要

成安造形大学附属近江学研究所

第13号 — 2023

OMI MULTICULTURAL INSTITUTE AFFILIATED WITH

SEIAN UNIVERSITY OF ART AND DESIGN RESEARCH JOURNAL VOLUME 13 — 2023

目次

茗荷村見聞記 ……3
—血縁、地縁のコミュニティ　近江学の視点から—
加藤　賢治　成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長

近江の懐をめぐる 7 ……15
石川　亮　美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員

茗荷村見聞記

―血縁、地縁のコミュニティ　近江学の視点から―

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長

加藤　賢治

茗荷村見聞記
―血縁、地縁のコミュニティ　近江学の視点から―

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長　加藤　賢治

Name:
KATOH　Kenji

Title:
Observations of Myoga Village: A Community of Blood and Geographical Ties
―From the Perspective of Omi Studies―

Summary:
Ohagi Myoga Village in Higashiomi City, Shiga Prefecture celebrated its 40th anniversary. It is an ideal place where people with disabilities and able-bodied people coexist. Currently, the Omi Multicultural Institute is focusing on communities based on geographical and blood ties, and for the past three years we have been observing various communities over time. As an introduction, I looked at Ohagi Myoga Village and at the nature of local communities that will exist in future society from the perspective of Omi Studies.

はじめに

二〇二一年、近江学研究所の共同研究者として、連携している琵琶湖環境科学研究センターの統括研究員であるキム・ゼギュ先生から、大津茗荷村（大津市伊香立）について、電話がかかってきた。大津を拠点とする大津茗荷村は、障害を持つ人や健常者がともに暮らし、働く場を創出して、六次産業を展開するソーシャルファームであり、成安造形大学の教員や学生たちとともに活動できないかという漠然とした内容であった。

元々、茗荷村とは、今から四十年前に、東近江市の大萩という集落に誕生した共同体組織で、開村当時から琵琶湖環境科学研究センター元センター長の内藤正明先生が興味を示され、長年にわたって後方から支援されてきたという。

まずは、相談者である大津茗荷村を主宰する薮田喜山氏と会って話を伺うことにした。

薮田氏からはじめに伺ったのは、なぜ「茗荷村」と名付けられたのかという話であった。この話は、非常に興味深いものであり、後述するが、筆者が宗教民俗研究者として、茗荷村の活動に触れてみたいと思う強い動機となった。

また、障害児教育の先駆者の一人と言われる田村一二氏の思想によって近江に開村されたということにも興味を持った。

現在、近江学研究所では「惣」「座」「講」研究プロジェクトとして三ヶ年の研究プロジェクトを進めている。内容は、禍を経て地縁・血縁や生業、趣味嗜好などのコミュニティを再検証しようとしている。この茗荷村の活動は、まさに地縁血縁のコミュニティが元になっており、そこに様々な生業を持つ人々が集まってくる。そして、なんといってもみんなが楽しいコミュニティでもある。

数日にわたって取材した茗荷村の見聞記を報告すると同時に、未来のコミュニティの姿を映し出す試みとしたい。

第一章　茗荷村の概観

（一）大萩茗荷村を訪ねて

二〇二三年八月、大津茗荷村の薮田喜山氏の案内で、その村の原点である大萩茗荷村を訪ねた。薮田氏の拠点は大津市の北部、伊香立にあり、そこから車で琵琶湖大橋を渡って東近江市に向かった。約一時間半、名神高速の八日市ＩＣを降りて湖東三山の一つとして知られる百済寺の近く、東近江市上山町にある就労継続支援事業Ｂ型施設である社会福祉法

人美輪湖（びわこ）の家「工房和楽」に到着した。そこで、現在、大萩茗荷村代表である小泉一郎氏と合流し、ともに茗荷村に向かった。

大萩茗荷村は、昭和五十七年（一九八二）七月八日に、当時の愛東町大萩、現在の東近江市百済寺甲町で誕生した。茗荷村の構想は、教育者で思想家でもある田村一二氏による。田村氏は、太平洋戦争終戦後の昭和二十一年（一九四六）に、糸賀一雄、池田太郎とともに養護兼知的障害児施設「近江学園」の創設に中心的な役割を持って関わり、その後、知的障害者更生施設の創設や、知的障害者教育を推進する組織である茗荷会を昭和五十四年（一九七九）に設立してその代表となり、その後、障害を持つ人と健常者がともに暮らす村として、大萩茗荷村を開村した。

「工房和楽」から車で山道に入り、約二十分林道を進むと大萩茗荷村に着いた。

入り口には、陶版が組み合わされ「大萩茗荷村」と表示された可愛らしいモニュメントがあり、そこに車を停めて徒歩で村に入った。中央に小さな広場があり、周辺に木造の建物が十棟ほどであろうか佇んでいる。全体的には森林の窪地のようなところになるのだろうか、大萩茗荷村は自然の中に溶け込んでいるように感じた。

写真1 入り口にある「大萩茗荷村」と表示されたモニュメント

その場所は、かつて大萩村という集落が存在したが、厳しい自然環境の中、自然災害をきっかけに集落ごと麓に移住した。田村氏は、わざわざその跡地を選んだというのである。

開村当時は、電気、ガス、水道は無く、車で麓まで二十分、麓からJR能登川駅まで三十分。もちろん近くに病院や学校、市場も無い。

田村氏は茗荷村という理想郷をつくろうと思い立ったとき、日本全国の福祉施設を見て歩きながら、候補地を探したが、最終的にこの地を選んだ。もちろん駅に近く、ライフラインが整った好条件の土地もあったそうだが、最も自然環境が厳しい場所を選んだというのである。田村氏は、障害がある、無いにかかわらず、ともに協力して村を運営するには、過酷な自然環境にある方が良いと考えた。ライフラインが整い、何もかも便利な暮らしの中に、苦労は無く、苦労が無ければ、協力したり、感謝の気持ちが生まれないと考えたのだという。

写真2 大萩茗荷村の様子 小さな広場に建物が散在する

写真4 田村氏が生活していた「茗荷村研究所」

写真3 広場横の建物 数名の村民が生活している

ご案内いただいた小泉氏は、開村から五年目に入村されたとのことで、開村当時の苦労は知らないということであるが、「田村先生とこの地で語らった記憶は鮮明に覚えている」と懐かしみながら、当時、田村氏が拠点としていたという建物（現在は茗荷村研究所という名称で呼ばれている）の中を案内していただいた。

田村氏は、かつて洋画家の須田国太郎に師事したこともあり、襖には自身による独特な味わいがあるカッパやキツネ、地蔵菩薩などが描かれ、民俗的な世界が表現されていた。

当時、和やかに語らったという囲炉裏や、家族の写真なども飾られており、亡くなられるまでここに出入されておられたという雰囲気が十分に伝わってくる。

他に、食堂と言われる施設もご案内いただき、現在も村の住民がここに朝、昼、晩に集まり、十数人が協力しあって暮らしていると伺った。食堂の世話をする女性と、村に暮らす住民の男性に出会ったが、お二人とも始終笑顔が絶えなかった。

大萩茗荷村を後にして、麓の百済寺の近く、

写真５ 田村氏が描いたという襖の絵

写真６ みんなが集まる食堂内部

写真７ 食堂の厨房

「くだら山荘」と呼ばれる茗荷村の交流施設にご案内いただき、そこで、茗荷村前代表で、田村一二氏とともに開村当初から村の運営に深く関わり、田村氏の思想、精神を受け継ぎ、支えてこられた高城一哉（たかしろかずや）氏と出会った。

この日は、「くだら山荘」にて、ゆっくりと話を伺うことができた。

（二）大萩茗荷村の現在

田村氏の思想をもとにした茗荷村の開村と同時に、高城氏が家族とともに入村されたという。そこから現在まで四十年という歳月を経て、現在は、二〇〇名を超える村人が県内各地に散在するという。ここではその組織について伺ったことを記してみたい。

大きな括りとして、大萩茗荷村という村が存在し、本拠地は先述した東近江市百済寺甲町（大萩村）にある。そこには、宗教法人として宗派を問わない「茗荷山天保寺」という寺院があり、住職が常駐し、仏式、神式の行事が一年を通して行われている。

そして、別に「ＮＰＯ茗荷村」というＮＰＯ法人が存在し、そこでは国内外の社会的弱者に対する支援活動を中心に、研修事業、福祉事業、保育事業、国際協力事業等の非営利活動が展開されている。また、情報紙の発刊を通して、茗荷村全体の広報活動も行っている。

その他、下記の施設が存在し、大萩茗荷村全体を構成している。

○ＮＰＯ三艸苑（みくさえん）家族（東近江市青山町）
・ファミリーホーム　やまゆり（定員六名）
・ファミリーホーム　三艸苑（定員六名）
・グループホーム　なんじゃもんじゃの木（定員五名）
・グループホーム　なんじゃもんじゃの木　みやこ（定員五名）
・グループホーム　なんじゃもんじゃの木　あおやま（定員三名）
・サテライト住居　千鳥庵
・グループホーム　花のうてな（定員四名）
・グループホーム　あしびか（定員四名）
・サテライト住居　がじゅまるの家
・天空（就労継続支援Ｂ型十名・生活介護十名）
○ＮＰＯ法人 わらべ村（東近江市青山町）
・グループホーム　愛育苑・愛育苑（定員六名）
・グループホーム　愛育苑・直心庵（定員五名）
・グループホーム　愛育苑・大楽（定員五名）
・グループホーム　自然寮・自然寮（定員六名）
・グループホーム　自然寮・かたつむりの家（定員一名）
・サテライト住居　アトリエ
○ファミリーホーム　石南花の家（個人運営）（蒲生郡日野町　定員六名）
○ファミリーホーム　すずらん（個人運営）（愛知郡愛荘町　定員六名）
○社会福祉法人　美輪湖の家（東近江市百済寺町本町）
・工房和楽（就労継続支援Ｂ型二十名）
・大楽（就労継続支援Ｂ型二十名）
・きらり庵（生活介護二十名）（特定相談支援・自立生活支援事業「はんどくさん」　地域生活サポート　日中一時支援）
・みょうが（生活介護十四名・生活訓練六名）
・おおきな木（生活介護二十名）
・暮らしを考える会（就労継続支援Ｂ型二十名　日中一時支援）
・フルミナ（生活介護十三名）
・グループホーム　そのの家（定員五名）
・グループホーム　野の花（定員五名）
・グループホーム　松平の家（定員五名）
・グループホーム　清和の家（定員五名）
・グループホーム　陽気寮（定員四名）
・グループホーム　すずらんの家（定員四名）
・グループホーム　大樹（定員六名）
・高齢者グループホーム　檀那木（定員九名）
○社会福祉法人　美輪湖の家大津（大津市中庄）
・瑞穂（就労継続支援Ｂ型二十六名・就労移行支援六名　日中一時支援「パレット」「相談支援事業所ひなた」居宅・行動支援・移動支援「きりん」）
・茗荷塾ワークショップ　さかもと（就労継続支援Ｂ型二十名・自立訓練十名）
・美輪湖マノーナファーム（就労継続支援Ｂ型二十名・就労定着支援十名）
・和邇の里（生活介護二十名）
・愛育苑（生活介護二十名）
・資生園株式会社（就労継続支援Ａ型）
・グループホーム　大空（定員五名）
・グループホーム　大地（定員四名）
・グループホーム　瑞穂（定員四名）
・小規模多機能型居住介護事業所　真野の家歩歩（共生型生活介護　共生型短期入所）
○その他　関係団体
・大津茗荷村（滋賀県大津市中庄）
・野洲茗荷村　陽だまり（滋賀県野洲市辻町）
・東北茗荷村（宮城県石巻市山下町）
・ファミリーホームみんなの家（宮城県東松島市大塩字緑ヶ丘）
・ＮＰＯイワン農場（滋賀県東近江市百済寺甲町）
・ＮＰＯ愛の会（滋賀県愛知郡愛荘町）
・農業生産法人（株）茗荷村同労社（滋賀県東近江市市ケ原町）
・農業生産法人（株）茗荷村同労社大津市店（滋賀県大津市日吉台）
・グループホーム　和楽（滋賀県大津市和邇今宿）

大萩茗荷村が、十人少しで田村一二氏とともに開村して四十年。ＮＰＯ法人や社会福祉法人が次々に設立され、非営利の活動が続いてきた。このように続いてきた理由は何か。もちろん田村氏の崇高な理念と、熱い信念、そして実行力と努力があったから、ということは間違いない。そして、その思いを受け継ぎ、次の世代につないだ人物や、彼らを支えた人

たちがいたからであると感じた。

次章では、その田村一二氏の思想とそれを受け継ぎ発展させてきた事柄について述べてみたい。

第二章　田村一二氏の思想

（一）周梨槃特（シュリハンドク）と茗荷村の原点

田村一二氏の考え方を検証する際に、まずこの村の名称である「茗荷」について記しておきたい。この「茗荷村」という名称の由来は、筆者が二〇二一年に大津茗荷村を主宰する薮田喜山氏に出会い、茗荷村に興味を持ったきっかけとなった。

茗荷村の「茗荷」とは、お釈迦様の仏弟子である周梨槃特の説話に由来する。

バラモン教の信者であった周梨槃特は、生まれつき記憶力が非常に弱く、物事を覚えることが苦手であった。一方で兄の摩訶槃陀伽（マカハンダカ）は優秀で、学問に秀でていたため、バラモン教から仏教の教えに興味を抱き、舎利弗（シャリホツ）や目連（モクレン）とともに仏弟子となった。

その兄、摩訶槃陀伽の勧めによって周梨槃特も仏弟子となる。しかし、周梨槃特は大切な釈迦の教えが頭に残らない。ついに兄にも努力が足りないと叱られ、努力しようにも成果が出ず、途方にくれて祇園精舎を後にする。

ある時、悲しみに暮れる周梨槃特にお釈迦様が声をかけた。周梨槃特が事情を話すと「悲しむ必要はない。周梨槃特は自分のできないことを知っている。世の中には自分ができると思っているが、全くできていない者がたくさんいる。できないことを仮に愚かであるとすると愚かさを知ることが最も悟りに近づくことである」とお釈迦様は優しく促した。

そして、一本の箒（ほうき）を持ってきて、「ちりをはらわん」「あかをおとさん」という言葉を授けられた。

周梨槃特は、それからその言葉を覚えるために、毎日箒でちりを払うという掃除三昧の日々を送った。二十年間掃除を続け、その中で、一度お釈迦様に言われたことがあった。「何年掃除をしても上達しないが、上達しないことに腐らず、同じことを続ける。上達することも大切だが、根気よく同じことを続けることは、もっと大事なことである。これは他の仏弟子にみることができない大切なことである」。

周梨槃特はこのような言葉に支えられて掃除を続けていたが、ある時、「ちりやほこりは、いつもあるだろうというところにあるだけではなく、こんなところにもあるのかというところにあったりする。すなわち、自分が気づかないところにも、大事な物事が隠れている。自分は愚かだと自覚していても、もっともっと愚かな部分があるのかもしれない」ということに気付き、阿羅漢（尊敬に値する修行者）の悟りに達した。

仏弟子周梨槃特の説話の概要は上記の内容となるが、その後の俗説として、周梨槃特が亡くなり、彼のお墓に茗荷が生えたという話が一般に知られるようになった。茗荷村の「茗荷」は、周梨槃特の行いとその存在を意味し、村のシンボルとなっているのである。

これまで、近江の各地を歩きながら、各地に残る仏教説話に由来する伝承、伝説を取りあげてきた筆者にとっては、非常に興味深い話であった。思い返せば、筆者が幼い頃、母親から「茗荷を食べるとアホになる。昔、勉強ができひんアホな人が死んで、そのお墓に茗荷が生えたんやって」という話を聞いたことを思い出した。この話が、仏弟子周梨槃特の深い仏教説話に由来するということに感嘆した。また、調べてみると赤塚不二夫の名作漫画「天才バカボン」の「レレレのおじさん」のモデルが周梨槃特であるという俗説も目にして驚いた。

田村一二氏は、障害児童を周梨槃特になぞらえながら、賢者も愚者も隔たりなく活動できる祇園精舎のような場をつくろうとされたのであろう。そのことを「茗荷」という言葉が表している。

「茗荷」という言葉から、様々な関心ごとにつながり、茗荷村を創設した田村一二氏の思想や、村自体の取り組みに興味を持ち始めた。

（二）田村一二氏の思想

昭和六十三年（一九八八）に発刊された「茗荷村通信二十八号」に、田村氏の「茗荷村とは」と題さ

れた文章が掲載されている。田村氏の茗荷村に対する思い（精神）が簡潔に書かれていると思い、そのまま下記に取りあげてみた。

「茗荷村とは」

福祉ということは、語源から解釈してゆくと、つながりの水平化ということになる。施設も福祉の一つの型であるが、それが、垣で囲まれ、鉄の門で、完全に社会から隔てられているならば、語源からいって、本当の福祉のかたちとはいえないように思う。まして、その施設の中が、棟毎に錠前で遮断されているとなると、つながりの水平化という福祉の性質からみて、とんでもない福祉施設だといわねばなるまい。更に、そのような隔離的施設の数だけを見て、わが県は、福祉県であると鼻を高くしているのは困ったものである。

そこで「村づくり」に踏み切ったのである。ここは門も垣もない。賢愚、老若、男女、いろいろ差があるが、みんな仲よくやってゆく。これが差があって別なしである。そして、流汗同労の生活の中で、愚者を見る目が正当になった人が、社会に帰ってゆく。このあたたかい目が、障がいのある人たちをどれほどあたたかく励ましてゆくか、これを経験的に言い切れるのである。

茗荷村はこの目をつくり上げてゆくところである。そのためには「賢愚和楽」の場であり、その方法は「流汗同労」でなければならぬ。そして、このあたたかい目が、地球を洗う石けんになることを心から祈っている。

したがって、障がい児者をもった親御さんが、その人たちを茗荷村へ預けようとされるが、村の本質目標からするとただの分離隔離の場ではないということを理解していただきたい。

「茗荷村通信二十八号」昭和六十三年（一九八八）

田村一二

茗荷村には、四つの村是（村の目標、指針）「賢愚和楽」「自然随順」「物心自立」「後継養成」がある。これらも含め、田村一二氏が茗荷村創設以来、大切にされてきた精神である。

福祉という言葉は水平を意味し、障害者と健常者を分けるのではなく、ともに汗を流して作業に取り組む中で、「あたたかい目」が育まれ、村が一つになっていく。この真理を理解し、広げ、後世に伝えつなぐことが理想とされたのである。

（三）宗教にみる茗荷村の理念　つないできた人々

この田村氏の考え方に共感し、開村当初から入村した初代大萩茗荷村代表の高城一哉氏の存在が、この茗荷村の今にとって大きく影響したと考えられる。

高城氏は大津市膳所の出身で、社会福祉というよりは、資本主義社会の末路にある悲惨な戦争に心を痛め、これからの社会のあり方を考えてきたという。新しい社会とは何か。そこに共同体をつくるという考え方が生まれてきた。小説家で文化人の武者小路実篤と彼らが所属する白樺派の活動家たちが構想した「新しき村」の実践などが刺激になった。また、そのような村、理想郷をつくるためには、例えば、仏教でいう慈悲、キリスト教でいう愛、儒教がいう仁など、人としてどうあるべきかということも大切である。一人ひとりがそれら大切なことを理解しなければ、理想郷にはたどり着かない。高城氏は、仏道に入って千日回峰行を満行した箱崎文応大阿闍梨に師事し、考え方を固めていった。

そして、戦争孤児の救済に関わって「この子らを世の光に」という「近江学園」で糸賀一雄氏や池田太郎氏、そして田村一二氏に出会い、孤児の面倒を見ながら、やがて茗荷村に入村するということになったという。

令和四年（二〇二二）に大萩茗荷村が誕生して四十周年迎えるということで、八月、盛大に記念式典が開催され、十二月に『大萩茗荷村四〇周年を迎えて』という記念冊子が発刊された。その記念冊子の中に記念座談会という企画があり、「後継養成を考える」という、村是の一つである「後継養成」について、高城氏をはじめ、現在の茗荷村を支えるキーパーソンが語るという貴重な記事が掲載されていた。

この記事の内容が、すなわち筆者がはじめに感じていた、なぜ茗荷村が開村からここまで発展してきたかという理由が理解できるのではないかと思い、

以下に内容を紹介したい。

（四）大萩茗荷村四十周年記念座談会から

大萩茗荷村の四十周年記念冊子に「茗荷村の心で生きること」後継養成を考えると題された座談会（二〇二二年四月十日　石南花の家にて開催）に参加された人々は、

・小泉一郎氏
　現在大萩茗荷村代表　座談会の司会
・高城一哉氏
　初代大萩茗荷村代表
・山形宗湛（そうたん）氏
　比叡山延暦寺理性院住職　高城氏のご子息
・小泉麥哉（ばくや）氏
　ＮＰＯ法人三艸苑家族　天空・宗教法人茗荷山天保寺奉仕会代表　小泉氏のご子息
・東浦弘昌氏
　農業生産法人（株）茗荷村同労社代表取締役
・前田洋和氏
　ＮＰＯ法人三艸苑家族　天空・ＮＰＯ法人茗荷村　大萩茗荷村通信担当
・高橋翔氏
　ＮＰＯ法人三艸苑家族　天空・ファミリーホーム石南花の家　元里子

の合計七名である。

茗荷村がこれまでに発展、継続してきた要因が、この座談会で語られる言葉に含まれるであろうと考え、彼らの語録を拾いあげてみた。

○小泉一郎氏
　現在大萩茗荷村代表　座談会の司会

・茗荷村に尽くされた人々のために我々がある。田村先生の理念である「二つ一つ」や四つの村是が、机上の空論ではなく実践を通して続けられてきた。それらを受け継いだ人々の思いが「後継養成（村是の一つ）」につながっている。

・高橋翔くんは、里子として村に来てくれた。不登校したり、コンピューターの勉強したり、司書の勉強したり、岡山に行ったりして、迷いながら結局、村がいいと思って戻ってきてくれた。

・支えると支えられるは、常に行ったり来たりで、許すと許されるも一つ。田村先生がおっしゃる「二つ一つ」。その両極を愛でつないで、学んでいるのが茗荷村。人間はそんなに立派ではないので、行ったり来たり、出たり入ったりしながら、それぞれに一生懸命やったら良いと思う。

・天保寺の経典「日々の祈り」の中には、まず村是があります。「親元根元、子は梢」というものも、まずご先祖や先輩を大切にしようという天理教の教えだと思う。禅宗でいう器とお茶の関係と同じことで、みな「二つ一つ」に行き着く。村に天保寺ができたことは、これから大きな意味を持ってくると思う。

○高城一哉氏
　初代大萩茗荷村代表

・どんな宗教でも最初に習うのは下駄を揃えて庭を掃いて、納屋を掃除すること。茗荷村では周梨槃特さんの行いを模範としている。親がやらずに子供に言っても「お父ちゃん、お母ちゃんがやらないのになぜするの」ということになる。田村先生や糸賀一雄先生も「お掃除」ということから、「親が行わないことを子供はしない」と話されていた。田村先生は奥様と二人で、子供たちの模範となる行動をとられていた。その姿こそが茗荷村の一番の学びである。

・田村先生が創られた石山学園は戦前からあったが、平和のための「愛の生き方」を実践するためには、一番弱い人を一番大切にする村づくりが理想にあった。

・本来の福祉は愛の実践であって、「今、自分はいいことをしている」という「福祉高慢」ではだめ。従来、茗荷村の人たちは必要以上のものは、みんな社会の困った人たちのためにお供えをさせてもらっている。これらは一燈園の方々に教わった。一燈園の石川洋先生は、カンボジアのポル・ポト政権に虐殺された人たちの孤児を中心に「スーベルファーム」という農園を作って、孤児たちが自立することに協力されていた。

・田村先生が考えた村是の一つ「賢愚和楽」は「差はあっても別はない」という。そういう世界は自然の中にある。これも村是の一つ「自然随順」につながる。今の社会は自然そのものを利害損得の対象として自然からたくさんのものを奪い取っている。私たちは命そのものが輝いている姿として、この自然を見ることを忘れている。

・「後継養成」を考えることは、他の命のために自分を捧げて、尽くして行けるかと考えることである。愛のまなざしを生きとし生けるもの全てに注ぐ「目玉石けんの愛」に、我々は生きられるかという大事なところに、今、茗荷村は来ていると思っている。

・「楽々の中に実はない」という田村先生の言葉がある。お釈迦さんがおっしゃった悉皆苦の中で、自分たちの魂を磨いて、そういう自立をしてほしい。それが田村先生ご夫妻が歩まれた道の花布教所の歩みだと思うし、自分を捧げて他のために尽くすという生き方を踏襲するのが我々弟子の立場だと思う。四十周年の後は、どうかそれでお願いしたい。

○前田洋和氏
　ＮＰＯ法人三艸苑家族　天空・ＮＰＯ法人茗荷村　大萩茗荷村通信担当

・自分にとって茗荷村は「勉強」を超えたものであった。前田家で一緒に暮らしていたＹさんは、耳が聞こえず、知的障害も持っていた。Ｙさんは私の父に「コーヒー一杯頂戴」とジェスチャーをしてねだり、父がコーヒーを渡すと、「おいしい、おいしい」と本当に喜んで飲む。家のことを頼まれたら、一生懸命お手伝いをする。自分はＹさんの姿と自分を比べて、長い間、引き裂かれるような思いをしていた。

・自分が不登校になった時、茗荷村では「こうあるべき」と指導や説教は全くなかった。茗荷村に暮らして、「至らない自分」「仕方ない自分」を一生懸命させてもらっていろんな方に出会って勉強してきた。

・「石南花の家」では、家族で毎日、朝晩に般若心経を唱えているが、「すずらんの家」でもやっている。ある時、父（雅敏）が、高城さんから「子供たちが村是を知らないとはどういう子育てをしているんだ」と叱られた。その日から、お勤めの後に四つの村是をいうようになった。

○山形宗湛氏
　比叡山延暦寺理性院住職　高城氏のご子息

・茗荷村で生まれて育った。生活そのものが茗荷村だったので、障がいがある人もない人も、いろんな人が日常の中でみんな一緒にいるのが当たり前だった。茗荷村では、いろいろな人とご縁を結んで、家族になったりして、つながっていく。今、茗荷村を見ると、高城家も小泉家も人がいっぱい。高城の家族がいつの間にか増えているから、一体どこまでが高城家なのかと思っていた。ご縁でつながり、生活の中でつながる。茗荷村の「家族」という感覚は、言葉で説明してもわかるものではないと思う。

・茗荷村は弱い人を大事にする。社会的に弱者と思われている人は、本当は私たちの先生だと考える逆転の発想が茗荷村である。例えば茗荷村では鶏を飼って世話をしているが、実は人が鶏に世話をされていることもあるかもしれない。農作物に人が育てられたり、学校でも生徒に先生が学ばされているということも同じ。

・これは仏教観でもある。自分がやっているように見えて、実はやってもらっている、させてもらっている。そこに気づけたら、ものすごく物事がやりやすくなり、それぞれの良さが感じられる。

・茗荷村の歴史の中で、四十年を経て、天保寺ができたことは非常に大きいことである。天保寺ができたことで、ここでみんなが生きていけるという大きな道筋が見えてきた。初代住職の前田さんは、第二世周梨槃特さんだと思う。道の花布教所を田村先生から引き継がれたということは、先輩を

大事にして、その心を引き継がれたことは重要なこと。

○小泉麥哉氏

ＮＰＯ法人三艸苑家族　天空・宗教法人茗荷山天保寺奉仕会代表　小泉氏のご子息

・山形宗湛さんと同じく、自身も、生まれた時から生活そのものが茗荷村だった。「石南花の家」が茗荷村だという感覚がある。両親が自分の生き方としてやっていることなので、大変そうに見える時もあったが、それを生活の軸としている姿を見ると幸せそうだとも思っていた。「こういうことだからしなければいけない」と言われたわけでなく、それが当たり前だと思って育った。

・一旦、普通の一般的な介護施設に勤めたが、何か違和感を感じ、施設のやり方にも自身の考えがあわず、茗荷村に戻ってきた。現在は「天空」で活動をしている。

　誰かのためにさせてもらうことは、こんなに幸せで良いのかという感覚がある。当たり前に奥さんがいて、子供がいて、食べるものがあって、屋根があって、それを大事なことだと思える自分がいる。小さい時から見てきた親や村の人たちの背中が、それが大事なことで、幸せなことだと教えてくれていたのだと思う。

・自分自身が「村」になりたい。自分が一生懸命やる、大事なことだと思ってやる、楽しそうに村のことをやることが一番大事で、自分もそういう村の人たちを見て、すごいなと思う。いろんな人たちの姿を見て、自分もそうなりたいと思う。「自分がしながら、相手からされている」という経験を毎日させてもらっている。

○東浦弘昌氏

農業生産法人(株)茗荷村同労社代表取締役

・大学で農業を学んだ。自身は、もともと人付き合いもそんなにできないし、社会に合わせることも得意ではない。障がいのある人もない人も一緒に活動している茗荷村という存在を知ってこの村に来た。農業をすることが目的ではなく、社会的弱者と言われる人たちと一緒に田んぼや畑をしたいという思いで来た。

・村では、農業生産法人「同労社」で畑をさせてもらっている。現代の農業の姿ではなく、昔の「農」の考えを大切にしたい。それがすごく可能性のあることだと思いながら、実際にできているかわからないけど、やってきた。

第三章　茗荷村のこれから
～近江学の視点で見る～

(一)「石南花の家」と小泉氏の家族

　二〇二三年の暮れに、小泉一郎氏のご自宅でもある、滋賀県蒲生郡日野町の「石南花の家」を訪ねた。

　「石南花の家」は、元々、日野商人につながる家系の商家の民家を譲り受けたという古民家で、部屋が大小合わせて二十五室あるという。そこに〇歳から八十歳くらいまでの幅広い年齢層の、障害を持つ人、持たない人（身寄りのない人、里子さん）、小泉氏の家族、合わせて二十五人が暮らしている。

　小泉氏は大萩茗荷村に来て三十六年、日野に暮らして二十五年になるという。バブル絶頂期に東京農業大学で農業を学び、父親はこれからは経済の時代と言っていたが、それになぜか反発し、大学卒業後もタイの農村に入って古き良き時代の農業を体感した。そこで茗荷村に関係する人物と出会い、日本に帰って大萩茗荷村に初めてやってきた。

　茗荷村で、高城さんと出会い刺激を受け、また現在の妻ともそこで出会った。三人息子がいるが、全て茗荷村で育て、今も一緒に暮らしているという。

(二) 近江学研究所が目指していること

　現在、筆者は近江学研究所で、文化誌「近江学」を編集しながら、これからの社会のあり方について常に考えている。近江学研究所では、当初、「近江のかたちを明日につなぐ」というところから、これ

からのものづくりを行うために、過去のかたちや、仕組みを検証することに重点を置いてきた。そして、近年になり、近世の暮らしから未来社会のあり方を考えるようになってきた。すなわち、近江に残されている地形、自然環境、そして祭礼やそこに現れるものに着目することで、これからの社会に生かすことができるものは何かと。

近江学研究所が発刊する文化誌「近江学」は、二〇一九年に「里」、二〇二〇年が「川」、コロナ禍で一年休刊の後、二〇二一年に「祭」というテーマで、近世の暮らしについて眺めてきた。そして二〇二二年はコロナ禍を経験して近江における「禍」をテーマにした。そこから見えてきたものが「コミュニティ」であった。近世の暮らしは、集落を単位とするまさに血縁と地縁のコミュニティが基本になる。そして、その集落を襲う自然災害（地震、火災、洪水、旱魃、害虫の発生など）に晒され、現代人も経験したコロナ禍のような、疫病（天然痘、コレラ、マラリア、スペイン風邪など）にも襲われてきた。これらに立ち向かうため、人々は、地域コミュニティの結束を深め、お互いが支え合って乗り越えてきたことが見えてきた。

近江学研究所では、二〇二三年に「惣（そう）（地縁、血縁のコミュニティ）」、そして「座（生業（なりわい）のコミュニティ）」、「講（楽しみのコミュニティ）」という内容で、この三年間、身近にある様々なコミュニティについて研究を深める計画を立てている。

（三）近世集落の姿

近世の集落を眺めると、基本的に、その場所で生まれ、そして育ち、家族を持って一生を終える。暮らしは、その場所にあるもので家を建て、畑や田圃を造成して作物を植え、消費する。地産地消は当たり前で、ほとんど無駄がなく使用した道具やものは大切に扱い、最後は自然に帰っていく。すべてが地域（集落）内で循環する。

日常の農作業や、道路の補修、家の修繕、災害時の備えなど全てのことは村人が協力して集団で行う。ここに深く結びついたコミュニティが形成されるのである。また、日常の楽しみもみんなで共有する。神様や仏様など信仰をもとにした「〇〇講」と呼ばれる組織が形成され、そこでは様々な楽しみが展開される。年に一度の村の祭りは全村人が参加する最大の行事である。

（四）近現代社会の弊害

一方で、現代の暮らしに目を向けると、インフラストラクチャー（交通、電気、水道、ガス、ゴミ処理など）の整備が行き届き、合理化されて生活するにあたって非常に便利になった。言い換えると隣人に頼らずとも生活ができる仕組みが整った。娯楽についても、いつでも誰でもが手軽に個人で楽しむものが、家の中にもあり、町にも溢れている状況がある。

これらを近世と比べてみると、全く逆の暮らしのかたちであると言える。もちろん近代社会は、大量にモノをつくって消費することで、経済を大きく発展させてきたのであるから、当然の結果として現代の社会がある。近代社会は意識的に近世の共同体を解体し、便利で豊かな暮らしを実現した。しかし一方で、環境汚染や紛争の勃発、地域コミュニティの希薄化とそれに伴う個人の孤立など、様々な弊害が明るみになってきた。

幸せな未来社会をつくるためには、もう一度、近世社会に目を向け、そこから何かを見つけて行かねばならない。近江学研究所の研究は、近江の貴重な風土を検証し、未来社会へつなぐことを目的としている。

（五）現在の茗荷村の姿に思う

その視点で、茗荷村を訪ねた時、筆者は現代において、近世社会の至宝を垣間見た思いがした。以下にその項目をあげてみたい。

・田村氏の思いがあったというが、過酷な自然状況の中に村をつくることで、共同体の結束が生まれ、みんなが助け合い、そこに深い絆が生まれること。

・山形宗湛氏や、小泉麥哉氏など茗荷村で生まれ育った人たちは、障害がある人、無い人が普通の家族として扱われ、みんなが平等で、認め合い、村是にしたがって暮らすことが当たり前であると感じている。そして、大家族が普通の暮らしであること。

・弱い人を大事にすること。社会的に弱者と思われている人は、本当は私たちの先生だと考える逆転

の発想が茗荷村にあること。

・地域に存在する農作物や生物を大切に扱い、その恵みを享受していること。

・四つの大切な村是を中心に神仏を超えた教えを持った宗教法人「天保寺」が村の精神の支えとなっていること。

・年間を通して、様々な行事（新年会、進級進学祝い会、田植え、座禅会、潮干狩り、寺子屋キャンプ、地蔵盆と盆踊り、彼岸会、稲刈り、焼き芋、お楽しみ会など）が設定され、村人が協力して行事を行い参加していること。

現在、「環境、経済、社会」の均衡を取りながら、国際社会が十七の目標を掲げているＳＤＧｓ（Sustainable Development Goals）が広く知られているが、茗荷村の取り組みの中に、十七の全ての目標が網羅されているように思う。

高城氏が話しておられたが、「田村先生が開村時は茗荷村の活動は、外の人から中々理解してもらえないが、いつの日にか、茗荷村のあり方が普通になる日が必ずくる。来ないといけない」。

確かにその通りなのかもしれないと筆者も改めて感じた。

おわりに

茗荷村には、茗荷村で生まれた人、茗荷村に興味があって遠くからきた人、身寄りがなく里子としてやってきた人などいろんな人が暮らしている。いわゆる地縁、血縁の濃いコミュニティが形成されていた。

二〇二四年の元日に、石川県能登半島を烈震が襲った。復旧の目処が立たず、辛い思いをしている方々がまだ多くおられると聞く。このような大災害は、日本においてはいつどこで起こってもおかしくない。その際に最も大切なのが、地域コミュニティであると言われている。災害時の救助活動から復旧活動、災害後の心のケアなど含め、地域コミュニティが果たす役割は大きいとされている。

茗荷村のような、しっかりとしたコミュニティの存在が求められているということも改めて感じた次第である。

今後も、四十周年を迎えた茗荷村の活動には注目していきたいと考えている。

今回の取材でお世話になりました大津茗荷村の薮田喜山様、大萩茗荷村代表の小泉一郎様、高城一哉様にこの紙面をお借りして御礼申しあげます。

参考文献・資料

・『大萩茗荷村四〇周年を迎えて』大萩茗荷村編・発行　二〇二二年
・田村一二『茗荷村見聞記』北大路書房　一九七一年
・田村一二『賢者モ来タリテ遊ブベシ　福祉の里　茗荷村への道』ＮＨＫブックス　一九八四年
・文化誌『近江学 里―のいとなみ』第十一号　成安造形大学附属近江学研究所編　サンライズ出版　二〇一九年
・文化誌『近江学 川―とはぐくむ』第十二号　成安造形大学附属近江学研究所編　サンライズ出版　二〇二〇年
・文化誌『近江学 祭―よりどころ』第十三号　成安造形大学附属近江学研究所編　サンライズ出版　二〇二二年
・文化誌『近江学 禍―転じて』第十四号　成安造形大学附属近江学研究所編　サンライズ出版　二〇二三年
・文化誌『近江学 惣―はじまりのコミュニティ』第十五号　成安造形大学附属近江学研究所編　サンライズ出版　二〇二四年

映像資料

・ＤＶＤ『茗荷村見聞記』原作：田村一二　監督：山田典吾　製作：現代ぷろだくしょん

近江の懐をめぐる 7

美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員
石川　亮

近江の懐をめぐる 7

美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員　石川　亮

Name:

ISHIKAWA　Ryo

Title:

Omi's *Futokoro* (The Heart of Omi): Part Seven

Summary:

Using a survey of an area in Shiga called Shukubamachi I will examine “techniques” and their “spirit” in order to answer the questions: “Why have these particular techniques been preserved and passed down?” and “What special value were they perceived to encompass?” I will also look at why these examples are so limited.

「近江の懐」とは、近江（滋賀県）という風土に根を下ろして未来社会へ向けてものづくりや新たなライフスタイルや伝統の継承などを実践し発信している人々と、それらを育む近江ならではの風土や地域社会のつながりの場である。「命の水の周辺にある暮らしの中に活きづく生業」そしてその「クオリティの高い手技や精神」に焦点を当て、主に近江の主要な街道沿いにある宿場町や門前町などを訪れ、その場で起こる独特の魅力を見つけ出すことを心がけている。

二〇一六年十二月より滋賀県文化振興事業団（二〇一七年四月よりびわ湖芸術文化財団）が発行する「湖国と文化」に〝近江の懐〟と題して近江の宿場町におけるものづくりやそこで育まれた精神性、次世代につなげる新たなる価値を写真と文で紹介する機会をあたえられた。二〇二四年一月現在まで二十七回の連載が継続されており、二〇二三年一月より二〇二三年十月までの第二十四回から第二十七回までのオリジナル文を可能な限り残し、近江学研究所紀要として再編集した。

はじめに

七回目となる「近江の懐をめぐる」二〇二三年度の研究活動は以前のスタンスを取り戻しつつある。とは言ってみたが以前の私とは随分変わってしまった様に思う。COVID-19（新型コロナウイルス感染症）が二〇二三年五月八日に五類感染症として位置付けられたことにより、人々の暮らしは少しずつではあるがソーシャルディスタンスといった緊張状態から解放され、祝祭など引け目を感じること無く参加できることや交流できることに改めて喜びを感じる。

二〇二三年も引き続きロードバイクを介したリサーチから更なる展開となった。余談であるがロードバイクを介したコミュニティの広がりは私が乗り出した二〇二〇年当初よりも広がりを見せているのではないかと想像する。私と同様にコロナ禍に目覚めたサイクリストや、コロナ禍が落ち着き、以前の様に外出できること、さらに自身の体験を映像編集して動画配信する人、ソーシャルネットワーク（SNS）を活用して様々なつながりをつくっていく人など、潜在する様々なタイプのサイクリストが相当数存在すると言える。自転車はグループで乗るのも楽しいが自身の体力や趣味に合わせて一人で乗るのも楽しい。この楽しみをSNSなどで情報発信、共有しながら一人ひとりの価値観をも理解し合い、共有もする。健康、自然、観光、食、職など様々であ

る。それぞれがかけ合わさって予想外の経済発展があちこちで起こっている様に感じている。

はじめは石山寺門前にて代々地域観光を受け継ぎながらも自身の感性や生き方に拘り、和菓子と自転車の異種を徹底し、かけ合わせを提案する「おかみ」のスタンスに焦点を当てた。次に近江と若狭の県境で、新たな鯖街道ブランドを提案するカフェを経営しつつ、自転車普及から観光推進までサイクリスト、観光、行政を中継して橋渡しに翻弄する夫婦の活動を追う。そして近江今津で代々受け継ぐ和ろうそく職人の地域活動に目を向ける。和ろうそくづくりの拘りと、コロナ禍で消滅しかけた「高島おどり」の再燃のプロセスとその盛り上げ方の拘りについて、最後は新旭の一風変わったカフェ経営者にアプローチをかけた。本業の葭葺きから展開した古材商のパイオニアを紹介したい。

何をとってもその地域に唯一無二の環境、歴史、文化を継承しつつも、新たな価値創出を見出し、生業として成立させている。それは単にものづくりやその技術継承といったものではなく時代の流れや生活スタイルの変化に気づきつつ、それに抗う姿勢だけでなく未来思考型の哲学を提案し、かけ合わせや、組み合わせを実践することで「無形の価値創造」へとつなげ構築する。四者の試みを具体的に見ていく。

一、石山寺門前のおかみ

石山寺を目指すライドは度々挑むコースである。いつもなら東海道からのアプローチだが、浜大津へ出て琵琶湖岸を走ることにした。螢谷を過ぎたあたりで石山寺の山塊を避ける様に瀬田川が東側へ蛇行する。瀬田川岸（湖岸）から道へあがると銅板葺き唐破風仕立ての煙だしが屋根に乗る特徴ある建物が見えてくる。これまで石山寺に行く機会があると必ず立ち寄る場所で何か親近感を感じながらも訪ねるには至らなかった。今回は満を持してこの「石山寺の懐」を開けることにした。

・一枚板の看板

建物入り口、ひさし屋根の上にある一枚の板に「茶丈藤村（さじょうとうそん）」と掘り込まれた看板が掲げられている。これは大津市景観重要広告物指定第八号に二〇一三年に指定を受けた景観広告物である。これは大津市が二〇〇三年に古都指定を受け、まちなみ景観の魅力を伝える「古都大津」の景観を構成する重要な要素としたものである。実はこの指定に当時私は関わっていた。歴史的風土特別保存地区とその周辺を対象に坂本と石山寺周辺地域の調査選定が行われた。「茶丈藤村」の景観広告物（ひさし看板）は重厚感があり、店主とその父親が一緒につくり上げていることが評価されたと記憶している。現在も指定から十年になるがその様相は年月を経て趣が増し、特徴ある建物と同時に街並みを形成する要因と言える。

・手製のロードバイク

「茶丈藤村」は和菓子を出す甘味処である。その入り口付近にサイクルラックが常設されている。それはサイクリストが立ち寄り易く、「歓迎のサイン」と受け止めることができる。暖簾もさることながらこのラック設置は開店を意味し、横にロードバイクが必ず一台ある。それは紺色のクロモリ（スチール）製フレームの自転車だ。白いレザーサドルに揃いのバーテープがハンドルに巻かれている。ブレーキや変速機はシルバーパーツでビンテージ物が選択されている。フレームには通常メーカー名が記されているが「BIWAKOGUMA」と見たこともない名が入っている。フレームサイズが小さいことから女性用であることなど、少し自転車の知識がついてきた私は持ち主が只者では無いと予感していた。以前、お店の人に聞いたところ「店長の手づくりなんですよ」と返答があった。鉄の溶接、溶断などを作品制作の手段としてきた私としては何か親近感の湧く思いでいた。

・高校からのロードバイク歴

閉店前に伺った時だ。店主の徳永真理亜（とくながまりあ）さんは髪を後ろで結い割烹着姿で現れた。ロードバイク歴は高校生からで石山から京都の高校へ通学に使っていたとのこと。大学を卒業されて直ぐ大手ホテルに就職するが一年半ほどで離職。その後、当時石山寺門前で志じみの釜飯屋を生業とされていたお父様に相談を持ちかけ、この地で和菓子屋を開くことを決断

する。島崎藤村が二十歳の頃、石山の地「茶丈密蔵院」に寄宿していたことを伝える意図で店や建物に反映させた。看板の字は当時の天龍寺管長の書を板に写し、手彫りして制作されたそうだ。その時お父様から開店の条件に「たばしる」の文字を使うことを言い渡される。これがお餅の中に釜揚げ大納言の小豆と胡桃が入って「ゴロッ」とした食感が楽しめる和菓子「たばしる」だ。「石山の石にたばしる霰かな」という松尾芭蕉が詠んだ俳句がある。句意は「石山寺の硅灰石に勢いよく降ってははじけ飛び散る霰のさまは目にも耳にもなんと心地のよいものだろう」。この感じを表現するお菓子として創業時（一九九五年）に出来上がったとのこと。子育てが落ち着いてきた二〇一二年頃からロードバイク熱が復活する。競輪場のイベントで、比叡平にアトリエを構えオリジナル自転車の制作ワークショップを企てるエンジニアと出会い「ビワコグマ」の活動が始まる。これはロードバイクのフレームを設計して制作し、完成した自転車を自ら乗って走る。そしてレース出場などのコミュニティを広げていく活動だ。おかみは紺色のクロモリバイクを制作した後、北海道ニセコで開催されるグラベル（砂利道）レースに出場するため、二台目のグラベル用バイクをまたしてもクロモリで制作し、レースに出場した。カーボン素材で様々な形状フレームが開発される昨今、ホリゾンタルフレーム（伝統的な自転車の形）に拘りトレンドに左右されないものづくりや考え方を重視しているところが面白い。現在は自転車の活動は落ち着いてきている様だがおかみの自転車が店前にあることでサイクリストの穴場として定着していることは間違いない。

茶丈藤村の地は先々代の頃、宿屋を営まれていたそうだ。その後、おかみが開店するのを機に建て替え一九九五年より事業が継続している。石山観光協会の複数いる副会長も歴代徳永さんが務めてきたとのこと、様々な活動が重なり石山寺門前は今日の賑わいにつながっている。

一見別々に見えるお店開店、和菓子開発、自転車だが、おかみの継続した企てが見えてくる。

昨年末に取材の主旨を伝える打合せに伺った時はランニング姿での対面であった。数ヶ月後に開催される市民マラソンに出場するため、トレーニング中とのことだった。割烹着姿は女性を家内に留めるイメージもあるがランニング姿やサイクルウェアに変化するおかみは「その反動かな?」と言いつつ、割烹着姿で自転車を愛でる様子は、自身の在り方と地域の持続を頑張り過ぎずに示す態度に見えた。

写真1 石山寺門前に建つ「茶丈藤村」

写真2 大津市景観重要広告物指定第8号のひさし看板

写真3 和菓子「たばしる」

写真4 おかみのロードバイク（BIWAこGUMA）

写真5 店前のサイクルラックとおかみのロードバイク

写真6 店主の徳永真理亜さん

写真7 ロードバイクを愛でるおかみ

写真8 ひさし看板の元となった書

二、鯖街道の起点

若狭の春を告げる神事「お水送り」に数年前から縁あって参加している。三月二日、若狭神宮寺に湧く水を奈良へ送る神事だ。近くの遠敷川（おにゅうがわ）鵜の瀬と呼ばれる地で湧水を注ぐことで送られる。大陸の文化が若狭へ渡り、近江を通じて奈良へ伝播されたことを今に伝えている。そして鯖街道の名が示す通り若狭で水揚げされた物資が峠を越え、近江を通じて京へ運ばれたことは言うまでもない。現在は熊川宿を通じて今津方面へ抜ける国道三〇三号と、鵜の瀬上流からおにゅう峠へ、近年整備がされた近江へつながる道がある。

お水送りのご縁から若狭神宮寺へ通う様になっていつも目にするカフェがある。県境から九〇〇メートルほど福井側にある道の駅若狭熊川宿、その向かいに位置する「Saba*Cafe」だ。店先には「サバサンド」と書かれたのぼり旗が立ち、サイクルラックが設置されている。さてパンとの相性はどうか？と思いつつ店に入る。店の壁面に自転車レースが投影されている「鯖と自転車」一見つながりにくいが興味深い。メニューを見ていると「蕎麦屋さんでうどんを頼む様なものですよ！」と男性の声、思わずサバサンドを注文する。恐れながらも一口食べた瞬間、予想以上の美味で思わず「うまっ！」と心で叫ぶとその男性と目が合った。その人、反田和宏（たんだかずひろ）さんにしっかりお話を聞く。

まずはサバサンド、郷土の代表的食材である鯖を素揚げし、レタスと玉ねぎを一緒にバゲットにはさむシンプルな料理である。地域の交換留学事業の受入れで出会ったトルコ人の結婚式に呼ばれ、現地へ渡航した際に食したサバサンド「バルック・エキメッキ（Balik Ekmek）」が原点だ。二〇〇八年にこの地を見つけ大阪より移住。これまで続けてきた商業写真の仕事を持続しながらも熊川の地で新たな暮らしが始まり、二〇一二年より「Saba*Cafe」をスタートさせる。

次に自転車である。反田さんは商業写真を生業に車での移動が中心である中、納品や打合せなどの機材運搬を伴わない業務用にスポーツバイクを購入したのが原点でその機能性と機動力の高さに惚れ込む。様々な国で仕事を進める中、レンタカー利用から自転車利用への転換を考え始めるが出先でレンタサイクルは非常に困難で対価に見合わない。そんな時、高級自転車を良心的な費用でサブスクリプションできる仕組みに出会う。それはロンドンのサイクルウェアブランド（Rapha）創始者のサイモン・モットラム氏が自転車メーカーと連携する試みで、会員登録すると世界各国でその自転車がレンタルできるのだ。彼の名言「ロードレースを世界で一番メジャーなスポーツにする」に触発され、反田さんはエタップデュツール（ツールドフランスの一区間を走る一般参加レース）に参加するなど本場のサイクリング文化に魅了される。そしてその文化を若狭に呼び込む活動へ、まずは自身の拠点「Saba*Cafe」が日本で初めてRaphaのパートナーカフェの一つとして指定を受け、コアなサイクリストが若狭へと入る起点づくりから始まった。二〇一五年には地元でのサイクリング文化基盤づくりとしてサイクリングクラブワカサ（CCWKS）を創部させ三方五湖湖周道（ゴコイチ）をサイクリングしながら清掃活動をする事に着手する。その後コース開拓、サイクリングマナー向上を目的としたツアーライド、他団体との連携や健康促進、環境保全などサイクリング普及を通じて地域活性の可能性を広げる。二〇一八年には国土交通省の自転車活用推進計画を福井県内推進に注力しつつ世界中のサイクリストとつながるイベントに参加するなど、その受け入れ態勢を学びネットワークを広げる。

反田さんの本業の写真は広報活動としても並行する。二〇二〇年、コロナ禍であったが地元開催のサイクリングイベント「Raphaプレステージ若狭」開催のコースディレクションを行うなど現地側の無くてはならない牽引者となる。二〇二一年、若狭湾サイクリングルート推進協議会を発足し、若狭湾サイクリングルート（愛称わかさいくる）のナショナルサイクルルートの指定に向け本格始動する。様々な業務に対応するため、株式会社Saba &Co（サバアンドシーオー）を設立。サバカフェでのサバサンドの販売以外も事業展開が進み取材した当日も翌日の地域イベントに向け、パートナーで代表取締役のりょうこさんは仕込みに余念がない様子だ。最近はバゲットも自家製になり更に味、品質への拘りに熱が上がっている。

二〇二二年には若狭湾サイクリングルート推進室

（わかさいくる室）がナショナルサイクリングルート認定を目指し福井県に設置された。七月には反田さん自身が代表理事を務める一般社団法人WAKASABAY PRIMEを設立して自転車に関する事業からアドベンチャーツーリズム、地域文化体験、物産企画、飲食、宿泊など目的を持って訪れる人々のためのニーズに応える態勢づくりとその発信をスタートさせている。

お店を出て「Saba*Cafe」の裏手にガレージが建っている。そこには反田さんが若狭の山、海、湖を充分に走れる仕様の自転車の展示と消耗品の販売や簡単な修理対応も行う「Sabakaido Cycling Hub」を案内していただいた。ここには彼が数年の活動で築きあげた様々な関係を示す写真やグッズも展示されており「夢の自転車小屋」といった感じだ。

最後に、反田さんは「目的を持って訪れる人々を受け入れる態勢づくりが重要」と話された。宿泊施設も地元の暮らしを垣間見ることのできる民宿に魅力が向いている。用意され過ぎたツーリズム志向から目的を持った旅へ、知らない場所で自身を試す志向へと変化しているのだ。移住者であるからこそ見える視点であろう。近江から若狭へ入る起点となる地で新たな価値が芽生えている。

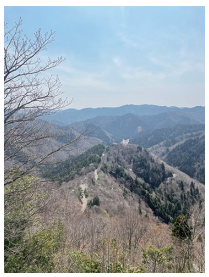
写真9 おにゅう峠より近江を望む

写真10 桜の「鵜の瀬」

写真11 若狭熊川宿の「Saba*Cafe」

写真13「Saba*Cafe」店内の様子

写真15 Raphaプレステージ若狭 メインビジュアル（写真：反田和宏）

写真12 サバサンド

写真14 反田氏夫妻「Saba*Café」の店前にて（反田氏提供）

写真16「Sabakaido Cycling Hub」外観

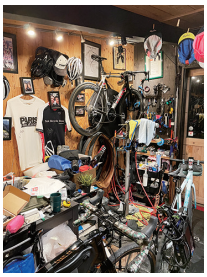
写真17「Sabakaido Cycling Hub」内部

三、今津のろうそく

七月上旬になると毎年の様に私のスマートフォンが大きく振動する。着信を見ると大西巧（おおにしさとし）の文字が、高島市近江今津を拠点とする「近江手造り和ろうそく大與（だいよ）」四代目社長その人である。そこでの第一声は「高島おどりをどうにかしないと…」という一言で、気づけば話しながらそれを持続するための当事者として策を練る一員になっている。二〇二三年はコロナ禍が五類感染症に位置付けられたことにより比較的人々の行動が自由になった。二〇一八年より始まった近江今津駅前ローラン名小路商店街で十二カ所の高島おどりを全て踊りきるイベントだ。コロナ禍で盛り上げることが出来なかったことからこの二〇二三年は大事な年になる。

さて、大西巧氏であるがこの商店街近くに店舗と仕事場を構える和ろうそく職人である。彼とは滋賀県のブランディング事業や地域クラフトフェアの開催など、協力し合った半ば同志である。今回の懐はその活動に焦点を当てる。

「近江手造り和ろうそく大與」は一九一四年（大正三年）、彼の曾祖父の代に今津栄区で始まる。既に当時ろうそくの需要は下降を辿りつつあり、庶民にとって燃焼効率の良い和ろうそくは贅沢品だったそうだ。硬化油、パラフィンなどの成分がろうそくのメインとなり大與も一時期は顧客のニーズに合わせた様々なろうそくをつくっていた。祖父の代、江若鉄道廃線に伴い現在の地へ拠点を移す。店前の道

は線路が敷かれ北へ少し行った場所に今津駅があった。そして父、明弘さんの時代に大きな転換を迎える。これまでの安価で臭いや燃焼など不安定で苦情が多い石油系のろうそくづくりを一切止め、手間はかかるが無臭で自然素材の櫨ろうそくに切り替えた。うるし科の櫨の実を乾燥させ、絞ったロウを温め、芯に直接掌でかける「手掛け」を繰り返してつくる。当初はそれを売るお得意さんが少なく相当苦労したそうだ。瀬田唐橋近くの金物屋さんが取り扱ってくれたことが支えになっていると伝え聞く。二〇一四年、いよいよ大西さんに代替わりする時に三つのことを行った。ブランディング、ホームページのリニューアルとお店改装、そして新しいプロダクトとして「米糠ろうそく」を取り入れた。これは櫨の生産地、それを摘む人の減少から原料入手が困難になる。日本の経済成長の反面その問題が表面化したのだ。次なる素材として植物由来の米糠からロウをとるろうそくづくりを選択することになる。火と人の関わりを見つめ直す「hitohito（火と人）」と名付けお米のろうそくとして新たに大與の商品に加わった。大手の百貨店への営業活動、クラフトフェアなどの催事に出店するなど様々なアプローチを行った。「実はそれでもなかなか厳しかったんです」と振り返って大西さんは言う。二〇一九年秋よりアメリカ西海岸からニューヨークへと本屋、洋服店、インテリアショップ、レストランなどに営業をかけた時にあることに気づいた。もともとキャンドルを日常的に使用する文化でレストランのテーブルに無臭のエコなろうそくは一目置かれていた。そして二〇二〇年コロナ禍に入る。人々は行動を制限され外出できなくなったこの頃から売り上げは徐々に上がり始める。全世界の人間がもう一度、自然環境との関わりを考え直す時間となった。エコフレンドリー、サステナビリティーが本当に自分ごとになってきたのだろうか、和ろうそくの灯は社会情勢を見つめ直すきっかけとなり自分自身と向き合うツールとなったのであろう。コロナ禍前の営業が身を結び、今も発注が続いている。また、今日のソーシャルネットワークがつくる「推し活」文化からの影響もある。日本の手仕事を推す俳優がこの和ろうそくを評価したことがきっかけとなり、注目する若い女性ファンが増えた。ろうそくと言えばこれまでは地縁からのつながりが主たる営業範囲だったと言える。お寺から仏壇屋、線香屋、金物屋から地域へ広がると想像できる。しかし大西さんの社長就任から様々な準備が漸く今、実を結んでいると言える。礎となった曾祖父からの火種を消さず先代の大きな決断を経て、誰もが使いすぎるエネルギー時代に疑問を持ち始めた今、石油を使わない和ろうそくがささやかな燈をつけている。

「高島おどり」であるが大西さんが二十六歳の時に遡る。今津の市民ホールでNHKのど自慢大会が開催された。友人と出場して本選に勝ち上がり当時人気の楽曲を歌って鐘が二回鳴った。そのあとアナウンサーに「高島でやりたいことはありますか？」と聞かれ「高島音頭の音頭とりやって高島音頭を広めたいです!!」と答えたことが始まりになっている。会場に居合わせた保存会の人の目に止まり、数年を経て大西さんの「高島の盆踊り歌保存会」活動が始まった。大西さんは公民館などで普及活動を企てるが思う様に進まない。この実情を漫画家イラストレーターで「盆踊る本―盆踊りをはじめよう！（青幻社）」漫画担当のチャンキー松本氏に依頼し、「高島おどり物語」として漫画化した。二〇一八年からそのイメージをポスターにして年々その広がりを見せている。地域で受け継がれる文化には必ず隠れたキーパーソンがいる。取材の最後に「何でも急にはできません。その時が来るまでに準備しておくことが大事なんです」と語った。

写真20 櫨の実

写真18「近江手造り和ろうそく大與」4代目社長　大西巧氏

写真21 改装された店の玄関

写真19「高島おどり」2023年版ポスター

写真22 櫨ろうそくをつくる仕事場

写真24「お米のろうそく」ティーキャンドル

写真26 店頭に並ぶ櫨ろうそく

写真23 名小路商店街での高島おどり

写真25「お米のろうそく」ブロックキャンドル

四、新旭の古材商

二〇二三年は十一月に入っても夏日を記録するなど、サイクリストにとっては「まだまだ乗れる」という期待を抱かせる。その反面、突然の風雨に晒されるなど気候変動の厳しさを感じざるを得ない。左回りで琵琶湖大橋西詰をゴールに設定する私は今津から大溝までのライドが一番辛い。湖西地域唯一の平野に比良山系からの横風をまともに受け、葭原を横目に湖岸をひたすら踏み込むイメージだ。新旭駅近く、湖西道路と並行する道沿いに倉庫の様相を呈した喫茶がある。数年前から幾度か本を持ちこみ長居する誰にも教えたくない隠れ家「喫茶古良慕（コラボ）」を紹介したい。

店先より何やら古いタンスや柱などが配置してあり苔の絨毯が迎えてくれる。扉を開けると様々な年代の古道具で構成された喫茶室が広がっており中でも江戸期の扉であろうか、それをテーブルにした席がお気に入りだ。そこで店主の島村義典（しまむらよしのり）さんと話すことができた。喫茶開店は二〇一三年と比較的最近であるが実はそれ以前の歴史がとても分厚いことがわかった。古材を扱うのだが正式名称は「島村葭商店」とある。名前にある通り元々は葭（葦／よし）葺きを専門とする商いを曾祖父の頃から始める。創業一九〇二年（明治三十五年）より琵琶湖に群生する葭、三メートルくらいに育ったものを刈り取ってストックする。そして高島の葭葺き職人を集めて県内外のあらゆる民家の葭葺きと修復を行っていたそうだ。戦後、屋根材の主役の変化に伴い葭葺きの仕事が減退していく。仕事が無くなれば職人の技の持続もできなくなる。一九七〇年代になると琵琶湖総合開発が始まり、湖と陸地の間がはっきりと区切られていくことで人々の暮らしは変化していった。並行する様に一九七九年で葭葺きの仕事を終えることになる。

喫茶から少し離れた古民家移築した事務所で改めてお話を聞かせていただいた。ここでもあちらこちらに古材が積まれている。玄関にたどり着くと広く取られた間取りの一つひとつが古材で組まれ、所々に埋木がされ丁寧に修復された後が確認できた。リビングに通されるとそこが先代の父、信義（のぶよし）さんが様々な研究者や顧客を招き入れて仕事をされていた場であることに気づいた。ここから本題に入る。葭の仕事が少なくなると同時に葭葺き屋根の古民家を解体する話が一緒についてくる。葭葺き職人は当然その民家がどの様な材で組まれ、その価値や意味を理解している。八十年代半ばから九十年代にかけて新建材にとって代わり効率よく建築が進む時代だ。信義さんは逆行する様に唯一無二の古材の価値をいち早く見出し京都の建築家と一緒に古民家移築のビジネスに舵を切った。

今でこそリノベーションは様々な展開を見せているが、スクラップアンドビルドの始まった時期、古材商という概念が未だ無い時代にいわば信義さんはこの世界のパイオニアと言って良いだろう。年老いて古民家を手放す人（売り手）、解体業者（バラシ）、工務店（再構築）、古民家移築を待っている人（買い手）、この四者の間に入ってマッチングを行う。出来る限り捨てるもの出さず、出来る限り四者の負担がない様にマネージメントする。そして古材を扱う技術、その知恵や工夫を、地域の職人に仕事を通して持続させる。これをモデルとして現実化させたのが信義さんの残した古民家の仕事場だ。現在はショールームとして開放している。リビングの奥の茶室、階段、二階の居間など快く見せていただいた。その組合せは遊び心のセンスを感じさせる一方で全てが古材の利活用であることがわかる。島村さんは「古民家は状態が良ければほとんど捨てなくて済む

のです」と語る。古材商は古民家移築の話がまとまれば、工務店や解体業の力を借りて、古材に「磨き」の作業を施すことで蘇らせることができる。また先人の保存技術は有害物質を使用しない工夫もあり環境に配慮がある。活かすも殺すも最初に物件を見てその行方をイメージできる古材商にかかっているのだ。この経験と磨かれたセンスは人間にしかできない仕事であることは間違いない。

さて、島村さんであるが専門学校卒業後、父親譲りの組み合わせるセンスを活かし、和食で自身のセンスを磨く。京都祇園の日本料理屋で修行しつつ、新しい料理屋店舗の内装を古材で手掛けた仕事に携わったことが契機となり、信義さんの継承者となっていく。葭商からつながる県内外の古民家移築を受け継ぎ、自身が磨いた料理の腕をも活かしつつ、古材商の仕事の魅力を次世代に伝える場づくりをスタートさせた。それが「喫茶古良慕」である。共創を意味するコラボレーションと「古き」「良き」暮らしを持続してきた人々を「慕う」気持ちが込められている。現在は遠く海外からの依頼や商店内装の部材活用など多岐に渡っている。島村さんとの話は尽きないが湖北余呉から急な電話が入ってきた。何かトラブルがあったかもしれないとのことで「ちょっと行ってきますわ！」と。地域の人との関係を最優先する姿に「目利き」としての責任感が伝わってくる。その後、彼がつくる昼御膳を古材カウンター席でいただいた。

写真27「喫茶古良慕」お気に入りの扉のテーブル席

写真29「喫茶古良慕」表札看板

写真31「島村葭商店」事務所のリビングルーム

写真28「喫茶古良慕」ギャラリー展示室

写真30「喫茶古良慕」古材に囲まれた入り口付近

写真32「島村葭商店」古材で組み上げた柱

写真33 湖岸道路（ビワイチ）横に群生する葭原

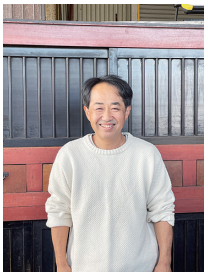
写真35 島村義典さん

写真34「島村葭商店」古民家移築のモデル

写真36 倉庫内に並ぶ古材と古道具

追記

紀要の冒頭は、二〇二三年五月にCOVID-19が五類感染症に位置づけられ暮らしが日常に戻りつつあることに始まり、コロナ禍をきっかけにロードバイクでの活動が主となり、そこで得られた情報や気づきが新たな展開につながることを示した。以前に比べよりローカルで、よりリアリティに満ち、よりチャレンジングなことに絞られている様に自身を俯

瞰して捉えている。目に見える実像と言うよりは、要因の重なりから派生していく「無形の創造性」に着目している様に感じている。

二〇二四年元旦、自宅近くの小椋神社の初詣を終えて数年振りに家族全員が揃う正月を迎えることができた。ここ数年の報告を互いに話し始めた矢先、またしても世の中を震撼させる出来事に見舞われる。最大震度七、石川県能登地方を中心に発生した地震を気象庁は即日、「令和六年能登半島地震」と定めた。翌日二日の夕刻、今度は羽田空港滑走路にて震災支援で離陸準備していたとされる海上保安庁機と着陸したばかりの日航機が衝突炎上する事故「日本航空五一六便衝突炎上事故」が起こり、その瞬間映像を何度も報道を通して見ることになった。久し振りに通常の正月を迎え安寧を祈願した瞬間の出来事であり、近江学紀要をまとめる一月中旬現在においても冷静に事態を捉えることは難しい。事態を早急に把握し即応することを絶えず求める社会であるが、「一旦踏み止まり事態を受け入れることも必要ではあるはず⁉」と考えることもできると感じた。

コロナ禍という自然の脅威に全世界が向き合ってきた今、我々は何を振り返り学ぶのか、感染症の脅威が少し収まってきた今であるからこそ、自然の脅威と向き合った状態を維持するべきだ。時には減速させ、抗うことを止め、受け入れる姿勢を維持したい。

成安造形大学附属近江学研究所
紀要　第13号

発行日　令和6年3月25日
発　行　学校法人京都成安学園　成安造形大学
附属近江学研究所
〒520-0248
滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話　077-574-2118
発行者　小嵜善通
編　集　成安造形大学附属近江学研究所
印刷所　株式会社 北斗プリント社

© Seian University of Art and Design 2024
ISSN 2435-4279